のも別としても普通數十萬坪、精密工業でも數萬坪に達してゐる。勞務者の數もこれに準ずるものであつて優々數萬に達してゐる。これは總ての工場について斯の如き大さが工場管理上適切なりや否やが問題となることを言ふ迄もないが、農村に近接して設けられる工場に關しては農業との關係上更に別個の檢討を必要とする。

勿論、斯の如き規模が單に建設上の便宜に出るものでなく、工場管理殊に作業能率上必要である場合は別であるが、これに對したる惡影響なしに規模を小さくなし得る場合もすくない。かゝる場合に規模の縮小が行はれるならば農工調整は凡ゆる面に於て容易となる。若し工場數地が集團坪數を減ずるならば數地撰定は十倍も容易となり農業上の觀點を考慮に入れることが可能となる。勞務に關しても一定限度の勞務者が農村から出るのは農村、農業を進める上に有利である。農村の勞務者が殆んど吸收し盡され農業が全く破壞されるといふのは純農村に急に巨大な工場が設置される場合である。その際若し工場の規模が中庸であるならば勞務の供給にせよ、住宅、教育施設等にせよ、附近農村又は地方都市の中へ融然と溶け込むに至るであらうこと、所謂農村工業がその一班を示してゐる。工業の地方分散に當つては、かゝる見地からも工場の規模が再檢討されなくてはならない。